

会 告

二〇〇四年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（火）午後一時より京大会館にて開催されました。

公開講演は間野英二、愛宕元の両氏により左記の演題で行われ、盛會裡に終わりました。

『バーブル・ナーマ』研究の

回顧と今後の課題

間野英二 氏

中国歴代帝陵の祭祀碑

愛宕 元 氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋定期例の理事評議員会において、二〇〇四年度会務報告がなされました。

二〇〇四年度

史学研究会大会講演要旨

『バーブル・ナーマ』研究の

回顧と今後の課題

間野 英 二

一 『バーブル・ナーマ』概観

『バーブル・ナーマ』は、十五世紀末の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ、アフガニスタンを経て、十六世紀の前半、インドにムガル朝を開設したバーブル（ザヒールツ・ティーン・ムハンマド・バーブル）が母語のチャガタイ・テュルク語で著した回想録である。この書物は、十五・十六世紀の中央アジア、アフガニスタン、インドの歴史、地理、社会、文化に関する貴重な史料であるばかりでなく、著者バーブルの率直な記述によって、イスラーム世界では稀な自伝文学の傑作としても高い価値を持つ。このため、この書物については、十九世紀の前半、ヨーロッパ、特にロシアとイギリスで研究が開始され、以来、多くの業績が積み重ねられてきた。しかし研究の土台とすべき校訂本がなお出版され

ていない状況にあった。

二 『バーブル・ナーマ』研究の回顧

筆者が『バーブル・ナーマ』に初めて関心を抱いてより、『バーブル・ナーマ』に関する研究の一端を論文として公表できるまでに、およそ二十年という長い準備期間が必要であった。これは、筆者の怠慢の他に、研究開始当時の日本のイスラーム研究の水準がなお低かったためでもある。筆者の『バーブル・ナーマ』研究の転機となったのは、三年間のハーヴァード大学への留学、京大文学部西南アジア史学講座助教授への採用、東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所永田雄三教授を中心とする共同研究「西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究」の開始、この研究会の活動の一環としての『バーブル・ナーマ』ハイダラーバード写本のローマ字によるコンピュータへの入力、文部省在外研究員としての海外でのバーブル関係の写本調査、コンピュータ上でのローマ字入力テキストのアラビア文字への転換、などである。そして、研究には長い時間を要したが、一九九五年から二〇〇一年までの七年間に、『バーブル・ナーマの研究』全四冊（I校

訂本、Ⅱ総索引、Ⅲ訳注、Ⅳ研究篇
「パーブルとその時代」、松香堂を刊行し、研究に一応の区切りをつけることができた。このうち、特に第一巻と第二巻は、待望久しいアラビア文字による校訂本の出現ということで、幸いにも、パーブルの故郷ウズベキスタンをはじめ、ロシア、アメリカなど海外の学界でも好評をもって迎えられた。このような形で研究を公刊できたのは、①東京外大テュルク語科、林佳世子氏のコンピュータ利用に関わる多大の教示と援助、京大文学部西南アジア史研究室関係諸氏の全面的な協力、②パーソナル・コンピュータの急激な発達とコンピュータ印刷という新技術の開発、③日本経済の発展（科学研究費などを利用して海外で何度も写本調査を行うことができた）など、様々な幸運に恵まれた結果である。

三 今後の課題

パーブル及び「パーブル・ナーマ」については、なお検討すべき課題が多い。①「パーブル・ナーマ」校訂本は出版したが、校訂の際に利用できなかったが、その後入手したテヘラン写本などを利用して、さらにより正確な校訂本の作成を目指したい。

ただし、現在のところ、修正すべき箇所は少ないと考えている。②パーブルは「パーブル・ナーマ」の他に、イスラーム法学、韻律学、イスラーム神秘主義等に関わる作品や『詩集』など、少なくとも五種類の著作を残した。これらの著作についても研究を進めたい。③「パーブル・ナーマの研究Ⅳ 研究篇 パーブルとその時代」で「パーブルの時代」の諸相について検討したが、この時代についてはなお不明の点が多い。今後は、例えば、近く発表する予定の「十五・十六世紀、中央アジアにおける君臣儀礼」といった問題など、残された課題の解明を続けたい。

中国歴代帝陵の祭祀碑

愛 宕 元

筆者はここ数十年來、中国歴代の皇帝陵を出来るだけ多く現地で見ることになつてきた。これまでに実見した皇帝陵は、秦漢、三国、魏晋南北朝、隋唐、五代十国、南北両宋、そして明清期のもの五〇以上に及ぶ。ただ残念なことに、五胡十六国期のものと所謂征服王朝の遼・金・元の皇帝

陵は未だ実見しておらず、今後に残された課題である。もともと五胡十六国と元の皇帝陵はいずれも潜埋方式であつて、地表になんら標識を設けなかつたので、実際には踏査しようがないのが現状である。さて、これら皇帝陵は版築工法で人工的に積み上げられた巨大な覆斗型の墳丘墓がほとんどであるが、唐代の太宗昭陵以下の過半は自然の山塊を利用したより壮大な規模を誇る。陵前には後世に立てられた様々な碑が残されている。古いものでは後漢光武帝原陵前の「大宋新修後漢光武帝廟碑」や北周文帝成陵前の「大宋新修後周太祖文皇帝廟碑」が残り、いずれも陵に付設された廟を宋代に修築した時のものである。また陝西省の秦漢陵や唐陵には清の畢沅が乾隆年間に関西巡撫であつた際に文献と地形を勘案しながら何時の何帝の帝陵であるかを特定した碑が立てられており、この碑が今日でも大いに役立っている。人民中国成立後には国省、市、県といった各級レベルの文物保護単位を示すコンクリート碑がほとんどの帝陵前に立てられている。そして従来あまり関心が持たれてこなかつた小さな祭祀碑がいくつもの帝陵前に残されている。これら

祭祀碑に注目して、その残存率や立碑時期などについて検討してみたい。まずは筆者が実見した帝陵での祭祀碑の残存するものを列挙すれば、以下の通りである。

漢文帝霸陵・所在地は陝西省西安市霸陵
区毛窰院村。康熙七年・同三十七年・雍正元年・乾隆一四年・同二〇年・同二五年・同二七年・嘉慶二四年及び年次不詳の清代祭祀碑九基が残存する。その他に方形基座のみが一六基残存する。

漢宣帝杜陵・陝西省西安市曲江郷三兆村
康熙七年碑二基・雍正三年・乾隆三年の清代祭祀碑四基が残存する。

唐高祖献陵・陝西省三原県徐木郷永合村。
康熙二七年の祭祀碑一基のみが残存する。

唐太宗昭陵・陝西省礼泉県烟霞・趙鎮・北屯郷。宋代以降の祭祀碑一三基が残存するが、明成化元年「御製祝文」碑・清乾隆一四年「御製祝文」碑以外は、ほとんどは摩滅や倒壊のため、現在は判断不能。

後周世宗陵・河南省新鄭県郭店郷陵上村。歴代の祭祀碑四四基が残存する。うち九基は陵上村民に持ち去られて村

内で二次利用されており、陵前に現存する最古碑は明宣徳元年碑、最新碑は清宣統二年碑で、明嘉靖・万暦年間の祭祀碑が多数を占める。

北宋八陵・河南省鞏義市西南芝田鎮。太祖永昌陵前に明正徳元年立の「祭祀祝文」碑のみが現存する。(明代二四回、清代二四回祭告がなされたことが明嘉靖『鞏県志』・清乾隆『鞏県志』に見える)。

かく見てくると、後周世宗柴榮の慶陵の祭祀碑が突出して多いのに気付く。五代最後の後周の二代目で、在位はわずか六年でありながら、その後の宋の統一の先鞭をつけたことから、世宗柴榮に対する後世の史家の評価は高いが、それにも増して彼を有名にしたのは元末明初に成立したとされる白話小説「水滸伝」であると考えられる。

『水滸伝』には世宗柴榮の嫡流の子孫である小旋風柴進なる人物が登場し、多くの無頼を邸に匿い、官憲の手が及ばんとすると宋朝より賜った「丹書鉄券」を示して撃退するといふ痛快な役割を果たすのである。庶民レベルにおいても絶大な読者を獲得した『水滸伝』の影響こそが、慶陵前の祭祀

碑の多さの最大の背景であろう。明代以降のものほとんどを占めるのも、このように解釈することで了解できよう。

二〇〇四年度

史学研究会総会の記録

間野氏は、インド・ムガル朝の創始者であるバーブルの回想録「バーブル・ナーマ」について概観し、四〇年におよぶ御自身の研究・校訂・訳注の過程を跡づけ、今後の課題を提示された。愛宕氏は、綿密な踏査に基づき、秦始皇帝陵から清西陵にいたる五三陵の現状を紹介し、陵前に建てられた祭祀碑が各皇帝の後世評を示していることを明らかにされた。お二人とも長年にわたる研究の成果と方法をわかりやすく語り、参加者に大きな感銘を与えられた。

両講演の間に総会が行なわれた。まず紀平英作理事長が挨拶した後、江川温氏が司会者に選出し、庶務・編集・会計に関する報告・審議がなされた。

庶務(吉川真司常務理事)からは、①開かれた学会をめざして会則を一部改正すること、②来年度から学生会員の会費割引制